新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会
〒951　新潟市下旭町109　鈴木敏雄方　TEL025－222－9548

中国青海省登山協会の皆さんをお迎えして

会長　鈴木敏雄

このたびの中国青海省登山協会員の来日については、当初3月下旬から4月上旬に来日予定との希望と、差し当り早急に招聘状を送って欲しい旨の要請を受け、長野県山岳協会と協議の結果、当協会でこれの招聘状と招聘保証書を作成し青海省登山協会へ送付した。

その後、中国側の諸般の事情で5月10日からとの連絡を受けたが、最終的に団長の都合から5月22日から10日間の予定で上海から成田へ、新潟県山岳協会の皆さんとは4日間交流し、その後長野県へ移動、同じく4日間長野県山岳協会の皆さんと交流、東京から成田へ、10日間の日程で日本に滞在し帰国するとの最終連絡。

この連絡を受けて日程の調整、諸種の手配、訪問先の折衝、視察箇所の確認など等々藤井副会長を中心に歓迎の対応策を具体的に計画した。

ここに改めて来日する青海省登山協会員9名を紹介する。

団長　喇　乗礼
青海省人民政府　副省長
高級顧問　王　広仁
青海省法政宣伝工作者協会
副会長
副団長　史　国枢
青海省民政庁　庁長
副団長　王　安宏
青海省登山協会　秘書長
団員　金　光譜
青海省社会団体工作促進会
秘書長
団員　范　国慶
西寧市社会団体工作促進会
会長
団員　祝　成禄
青海省酒文化協会秘書長
団員　呉　海元
青海省電力対外友好協会秘
書長
団員　鄧　海平
青海省登山協会　副秘書長

5月22日

来日予定の全員が日本へは初めてであり、更に通訳が同行しないとのこと。午後3時30分、到着便に成田空港への出迎えも必要であり、急遽室賀名誉会長、藤井副会長が成田へ直行。出迎える。

燕三条駅に弥彦村のマイクロバスと我々5名待機、新幹線の到着を待つ。

定刻に到着した新幹線からバスに乗り換え弥彦へ向う。

青海省登山協会の皆さんには来日して初めて日本の宿になる弥彦の大六に到着、休む間もなく日本での第一夜を弥彦山岳会の渡辺さん、燕三条駅へ出迎えに駆付けた吉田の堀川、木村の両氏、室賀、五十嵐両名誉会長、藤井副会長、鈴木とテーブルを囲んでの夕食会の開宴、床のなげしには、熱烈中国青海省視察団歓迎の横幕も張られ、歓迎の雰囲気はいやが応にも盃のピッチが早まる。名刺の交換もそこそこに乾杯、乾杯の連続した第一夜であった。

5月23日

早朝出発前に弥彦神社鳥居前で記念写真、樹齢百年を越す杉の木は初めて見た世界であり、杉並木の参道に感嘆、緑に包まれた弥彦山を眺めている様は、多分青海省の岩山砂山と比較したのであろうか。

バスで弥彦を後にし、木村さんの案内で燕合同物産館を視察、新潟に向かう。

県庁へ知事の表敬訪問、黄河の源泉が悠々の大河となって海に注ぎ、その水は富士山に繋がる。詞の掛け軸贈呈と記念品交換で表敬訪問は終わり、最上階の大回廊から新潟市内を展望する。

新潟市内で唯一の中国庭園と日本庭園で名高い天寿園を散策し、百畳敷の大広間に目を見張り、茶室で中国文化と日本文化の相似点を強調、天寿園を後にして関屋分水路の経緯と河口堰の説明を受け、県醸造試験場で専門研究員から日本酒の醸造工程、品質管理、試験研究の施設を見学、日本海側え最大規模を誇る水族館、マリンピア日本海を館長の案内で観覧、イルカの曲芸に一行は大喝采、団長の喇先生が場内アナウンスで指名され、イルカとの握手、これまた感激、若い女の子と握手するよりイルカとの握手の方が良かった、には一同爆笑。

市内観光はNEXT21で最上階ラウンジで市街を鳥瞰、地下街へ降りて西堀ローサを

視察、強行な一日ではあったが予定どおりに日程を進め、夜は、海外委員会の設営による青海省登山協会一行の歓迎レセプションを新潟厚生年金会館で開催する。

熱烈歓迎青海省視察団の横断幕に中国国旗と日本国旗を掲げ、国際色豊かな雰囲気の会場へ一行をお迎えし、歓迎会の開会、藤井副会長の司会で進行し一通り記念品の交換は当協会から青海省登山協会へ日本人形（佐渡おけさ踊子）を贈呈するなどセレモニーを終わり、乾杯また乾杯の連続、北国の春、など日本語、中国語の入り乱れてのカラオケも飛び出すやら、佐渡おけさの唄に始まり踊りまで出て歓迎会は最高潮に達し、時の経つのも忘れた一時を過ごし、真に有意義な交流の場となった歓迎会も名残り惜しく幕を引いた。

5月24日

夜明け前からの雨が止まず今日一日は雨を覚悟で佐渡汽船フェリーに乗り込む、出航の銅鑼を合図に全員甲板に出ると、西の空から青空が覗き雲の切れ間から陽も当たる。これでは今日の天気は大丈夫と甲板で新潟の街並を背景に記念写真、波一つ立たない鏡の海を船は進むにつれて佐渡の島影がぼんやりと見えてくる。誰からともなくビール、酒が配られ、5、6人で乾杯、白い姫崎燈台が望まれればすぐ両津港。大佐渡山地の山並みを背景に船は静かに両津港に着船。暑い程の日差し、向かいの自慢郷土料理、駒沢で昼食、佐渡山岳会、仲川さん、藤井さんの暖かい出迎えを受け相川に向かう。柱状節理の雄大な峡湾美の尖閣湾に案内する。揚島展望台の茶店にてサザエのつぼ焼をご馳走する。初めて見る角の生えた固い殻に興味があるのかお土産に持って帰るとのこと。後で聞いたら、机の上の飾りなど珍しい貝殻だとナイロン袋に全部入れて尖閣湾から相川金山跡へ、道遊割戸を望み、金山坑に入り、往時の金掘人足達の様子などつぶさに見て廻り、桐箱入りの金のネックレスを奥さんへのお土産に買う先生の姿も見受けられた。

佐渡唯一の見学酒蔵、尾畑酒造（真野鶴）を見学する。ビデオで酒蔵全体の紹介が終わると、酒よし、ワインよしと試飲し、大吟醸3本、更に全員に真野鶴の小瓶1打を戴いてアルコール共和国を後にし両津、宝屋旅館で佐渡山岳会員との交流会が始まる。

真野鶴の大吟醸で乾杯、二の膳付きの日本式宴会ですと中国の先生方にご理解を願い和やかな懇親交流会も乾杯を繰り返し何時まで続くことやら。午後8時から両津会館の観覧もあり中締をして全員両津会館の客となる。

佐渡ならやはり佐渡おけさに代表されるが、会館にお願いし青海省一行9名、ステージで踊り子と並んで記念写真やら、おけさの歌に合わせて皆んなで踊るなど、これぞ佐渡ならではと実感しながら、青海省一行皆様の喜び様はこの上ない楽しい一夜であった。

5月25日

佐渡の名残はつきないが朝のジェットに乗り込む。ほぼ満席で、途中、船長にお願いして全員コックピットの見学などして予定どおり新潟港着船。望月さん、渡辺さんの出迎えの車で長岡に向かう。

長岡での昼食後、日本一の発電量を誇る柏崎刈羽原子力発電所を見学。スケールの大きさに度肝を抜かれるが一通りの見学コースを案内いただき柏崎から長岡に入り、長岡技術科学大学で、中国からの留学生を囲んで交流と激励を兼ね学内の施設を視察、夜は、長岡東泉閣で有志による歓送会兼懇親会の開催、青海省登山協会前秘書長　呉延義先生の令嬢、呉暁敏さんも参加し錦上花を添えて交流会は新潟県での4日間、最後の夜を締括るにふさわしい宴席となり夜の更けるのも忘れる懇親の一時であった。

5月26日

藤井さん、小杉さん、渡辺さんと3台の車に分乗し、呉暁敏さん始め会員の見送りを受け新潟県に別れを告げ、長野県山岳協会員の待つ長野市ホテル信濃路へと車を進めた。

予定どおり長野県山岳協会の皆様に青海省登山協会の皆様方をお願いし、午後から長野県の皆さんと一緒に善光寺平から飯綱、戸隠と車を進めホテル信濃路に夕刻戻り、団長はじめ団員の皆様と固い握手で再会を約しお別れした。

このたびの青海省登山協会皆さんの来日については、数カ月前から連絡があり、準備は進めて参りましたが最後まで日程が決まらず皆さんに大変ご迷惑をかけましたこと、ここに心からお詫びいたします。

お陰様で青海省の皆様も非常に喜び、より一層私共山岳協会と青海省登山協会は固い絆で結ばれたものと確信いたしております。

これもひとえに協会会員皆様のお力添えがあればこそ、と深く感謝申し上げます。

特に、成田まで出迎えに直行した室賀名誉会長、藤井副会長はじめ、燕三条駅の出迎えに始まった五十嵐名誉会長、弥彦山岳会渡辺会長、みずき山の会の堀川、木村の両氏、又、急遽開催した厚生年金会館の歓迎会には海外委員会の皆様はじめ、ご協力いただいた平田理事長、平日にもかかわらず御多用中ご参加いただいた会員の皆様。佐渡では案内やら準備と奔走いただいた佐渡山岳会、志和会長、仲川、藤井両氏始め会員の皆様、又滞在期間中団員の移動、輸送に快くご協力いただいた望月さん、小杉さん、渡辺さん等会員多数の皆様のご協力、ご

支援によりお陰様にて青海省登山協会の皆様をお迎えすることができ、日程どおり無事に長野県へお送りできましたこと、ここにこの紙面を借り厚く御礼申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

第22回自然保護研修会に参加して

高田ハイキングクラブ　七沢　恭四郎

県山協自然保護委員会の、自然保護研修会が、5月18日（土）～19日（日）に糸魚川市大和川森林公園で開催された。参加者29名。

テーマ　（探鳥会と岩石）

講師　鷲沢澄雄氏（能生中学校教諭）

小野　健氏（県山協理事）

私は遅れた為、自然保護活動の各地区での発表が終わる頃、会場に入った。

18時より鷲沢講師の「野鳥観察から見た糸魚川の自然」が、スライドと説明された。

春夏秋冬の中での鳥の生態が克明に紹介さてた中で、特に興味を覚えたものについて報告致します。

○春を待つ鳥の中で、冬眠からさめたカエルを捕らえる、ノスリ

○春の訪れを告げる、ウソ

○繁殖行動の始まりでは、求愛給餌行動とハヤブサの空中餌渡し

○山地に生きるものとして、最強の鳥イヌワシ開翼長2m30cm、20㎢四方を縄張りとする

○河原の鳥として、キセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイ

○海の鳥として、町中にも姿を見せる、イソヒヨドリ

○秋の渡り鳥として、去って行く鳥コシアカツバメ・渡って来る鳥ヒシクイ・コチョウゲンボウ

○冬の訪れの中で、ユリカモメ、俗に都鳥と言う。

スライドが終わって講師の言葉の中で「野鳥が安全に生活できる場所は、人間にとっても、住みやすい場所といえる。私は野鳥の生態を見ることが好きであり、彼等の営みが悠久に続くことを願っている。そして、今はまだ、豊な自然を有するこの地に生きられることを感謝している」と言う言葉を聞き、共生出来る自然環境が、如何に大切であるかを知りました。

次に、小野講師のスライドを見せて頂きました。栂海新道ヒスイ他、印象に残ったのは、日本近代登山の父と言われる、ウェストンの来越した写真、明治27年のものなどもあり、感銘しました。

20時よりの懇親会では、地元とーろっこ山の会の方々より、アンコウ汁を頂き、各地区の地酒も出て、盛会でした。

5月19日3時30分に起床し、4時より探鳥会を行いました。遊歩道を歩き、ヒガラ・シジュウカラ・カワラヒワ・センダイムシクイ・ホウジロ・キビタキ・カケス・オールリ・ウグイス・ヤブサメ・ヒヨドリ、メジロ等教えて頂きました。

7時より朝食。8時50分、青海町総合文化会館集合。

小野講師より説明して頂く、「青海を知れば日本が見える」青海は岩石・鉱物の種類が、日本で最も豊富な地域として知られています。青海は日本列島の生いたちの謎を明かす、重要な舞台となっています。岩石・鉱物・化石・地形・植生・人類・大地が織りなすダイナミックな4億年のドラマ。青海を知れば、列島の生いたちが見えてきます。フォッサマグナの説明から、北海道南西沖地震や日本海中部地震の震源とされる、ユーラシアプレートと北米プレートの境が佐渡が島と能登半島の間を通って、糸魚川－静岡構造線につながっていること。またアンモナイトの化石を発見し、産する場所を塗り変えたことなど、学者の研究よりも一歩先んじる、自分の足で稼いだ成果を事細かく教えて頂いた。

次に講師が採掘された岩石庭園に案内して頂く。私はその後帰ったのだが残った参加者の話によると、栂海新道登山口まで行き、ウェストンの像と栂海新道の説明、日本海、親不知より朝日岳、白馬岳を結びルートの開拓、さわがに山岳会が6年の歳月をかけて拓いた、全長30㎞の山道のことなど、話されたそうである。

会が一丸となり遂行されたこと、頭が下がる思いが致します。

両講師には歩いて稼いだ尊さを教えて頂きました。

ありがとうございました。

少年男子　あと一歩で広島国体出場権逃す

第17回北信越国体山岳競技会終わる

国体委員長　森　庄一

7月26日から28日にかけ長野県大町市を主会場に開催された、第17回北信越国体山岳競技会は、連日の猛暑の中熱戦が展開された。

2日間の総合成績。少年男子・成年女子・少年女子とも3位となり、広島国体へのキップを手にすることはできなかった。

26日　本県選手団は堂々の入場行進で開始式に臨む。

27日　午前　縦走競技。成年男子・少年男子・成年女子・少年女子の順にスタート。少年男子3位・成年女子・少年女子4位でゴール。

成年女子は午後の登攀を3

位で終了、3チームとも翌日の踏査にかける。

28日　踏査競技。成年男子・成年女子は定点満点。少年男子・少年女子は1箇ミスる。成年男子1位、成年女子2位、少年女子3位、少年男子4位で終わる。

踏査競技の定点得点の重要さを改めて認識した。

応援団

藤井信副会長、平田大六理事長、山田智子理事、森庄一国体委員長、渡辺靖男、横山征平、成年女子の御一族多数。

選手団

成年男子監督　飯沼　聡
選手　小池慶彦、小池紀浩、中山友博、小池千万太
少年男子監督　佐藤　剛
選手　駒村　悠、丸山　剛、田丸敦希、小田　亮
成年女子監督　高橋賢吉
選手　登坂美香、近三千代、宮野　朋、佐久間由美子
少年男子監督　小竹聖一
選手　熊谷春奈、高橋　玲、佐藤玲子
審判員　縦走主任　安野正弘、登攀　稲田春男、踏査　高橋一郎

皆さん大変御苦労様でした。

全日本ボルダリング・コンペテーションに参加して

1996年5月19日　松本大会

高田ハイキングクラブ　稲田春男

さわやかに晴れ上がった青空のもと、長野県山岳協会の主催で松本空港にて大会が開かれ、日本を代表する選手達が集まり盛大に行われた。

新潟からは選手として小野、中島（長岡山岳会）、田中（ハングオーバーズ）が参加し運営面で稲田（高田ハイク）松本（アスタージャパン）がジャッジとして加わる。

松本空港脇の公園に幅10m、高さが各3m、4m、5mのウォール3棟がそれぞれ角度を変えて立ち並び、ウォールには長野県の代表する山々が描かれているという素晴らしい環境の中、ルートセッター東、審判長北山、選手総勢70名が男女同ルートで、A、B、Cのクラス別にわかれて競技が始まった。ルールはクラス別に5つの課題があり、各課題に対し3回の挑戦権がある。課題毎の難しさにより配点率が違っていて、少ない回数で完登するほど得点は高い。一定の時間を設けてトライするため、フラッシング競技とし、獲得ポイントの多い選手から順に5名が決勝に進出する。決勝は3課題をオンサイトで行い、3課題の合計到達高度によって順位が決定される。

Cクラスに小野、田中。Bクラスに中島。AクラスはJFAのポイントを獲得した選手等がエントリー。Cクラスでは、5課題をすべて1回でクリヤーした2名で決勝が行われ、みごと決勝ルートも完登した小野が優勝。田中も健闘したが勉強の疲れのためか惜しくも入賞を逃した。Bクラスは予選では元気のなかった中島だったがなんとか決勝進出を果たすと、決勝では持ち前のパワーとテクニックを発揮して優勝。いつのまにか調子が悪ければ悪いなりの登り方をマスターし、精神的にも大きくなっていた中島君でした。

Aクラスは高さがあるためトップロープで行う。決勝に残った5人は誰が勝ってもおかしくなく、華麗であざやかな登りを見せてくれた。

長野県松本市での大会で、新潟から参加してB、Cクラスで勝てたことは大変嬉しく、初めてコンペに参加した小野君、田中君、そして中島君には今後も大いに活躍を願うとともに、このような大会が早く新潟でも出来る様に努力していきたいと思っている。

◉フリークライミング愛好者の皆様へ

＊フリークライミングをやってる方、情報交換等、お願いしたいと思います。

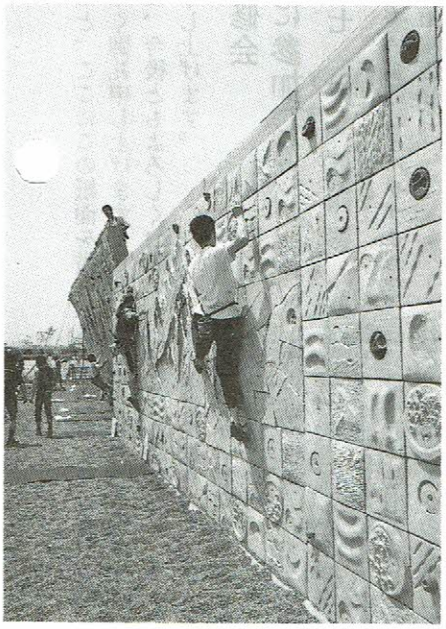
＊これからクライミングを始めたい、興味ある方、一緒にやりませんか。丁寧かつ親切に教えます。

連絡先 ☎0258-35-5830

同人ハングオーバーズ事務局

井波浩延

追記　新井市総合運動公園にクライミングウォールが完成しました。



平成8年度日本山岳会海外遭難対策研究会及び国際部委員総会参加報告

海外登山委員会　田中純夫

今年度の標記会議は岐阜県岳連の主管で、岐阜県高山市の国立乗鞍岳青年の家で行われた。丁度3日前から同じ会

場で日本登山医学シンポジウムも行われていて、同シンポジウムから引き続き参加した者もいて、盛会であった。

会議は国際部常任委員である広島三郎氏の司会で進められた。まず日山協坂口会長の挨拶があり、岐阜岳連伊藤会長の歓迎の挨拶へと続いた。

日程第1日目の6月8日は遭難対策研究会であった。まず「近年の海外登山における雪崩の遭難事例」ということで、最初は日本ヒマラヤ協会の山森欣一氏より94年ミニヤコンガ峰における遭難事例が報告された。続いて都岳連の中村正幸氏、川嶋保幸氏より95～96年冬期シベリア・ポベーダ峰における遭難事例がスライドを使って報告された。

以上の二つの報告を受けた形で、95年にチョー・オユーに登頂している国際武道大学の山本正嘉氏より「高所登山における運動能力の限界」というテーマでレポート報告があった。これは登山家であると同時に運動生理学者でもある同氏の経験と研究からの発表であり、高峰登山を実践している者にとっては極めて分かりやすく、しかも内容の濃いものであった。このレポートについては本年9月に予定されている県山協海外登山研究会の場で出来ればお伝えしたいものと考えている。

続いて福岡岳連の岡崎氏より、福岡チョモランマ峰登山隊が、インド隊より非難を受けている点についての経緯と事実報告があった。内容はインド隊の全く根拠のない誹謗に過ぎないというものであった。

日程第1日目の最後は、来日しているロシア・ユーラシア山岳連盟会長ムィスロフスキー氏によるスライドを交えたロシアの高峰の紹介であった。パミール、天山、コーカサスなど我々に馴染みの深い山々のほか、今回始めて目にするようなめずらしい山々もスライドを使って紹介された。

日程第2日目の6月9日は午前中を使って日山協国際部委員総会が、岐阜岳連高倉副会長の司会のもとに行われた。まず国際部の事業報告、続いて協議事項として、日山協でネパール、パキスタンに限って行われている海外登山推薦状発行の必要性について活発な意見交換が行われた。このネパール・ヒマラヤとパキスタンで行われる高峰登山での日山協の推薦状というのは今日では全く形骸化していて、実際現状ではこの推薦状がなくても登山許可申請が出来るようになっているものである。国際部海外委員総会としてはこの問題について全会一致で、今後廃止の方向で関係機関に働きかけて行くということで決議した。

続いて、各県岳連（協会）よりそれぞれの海外登山への取り組みや近況について報告がなされた。

最後は国際部常任委員の尾形好雄氏より、酸素ボンベを使った高峰登山の持つ危険性や注意についての報告がなされた。酸素を使った場合の安全性やメリットだけが強調されがちだが、その使用法や残量計算の甘さからくる逆の危険性が今日忘れられているという指摘であって、傾聴に値するものであった。

以上で2日間にわたる予定された日程すべて終了となり、岐阜岳連堀井理事長の挨拶で閉会となった。なお次回の国際部委員総会は福岡県で行うことが確認された。

総会終了後東北地区海外登山研究会のメンバーが集まり、2000年チョモランマ計画の進行状況、及びトレーニング山行の日程などについて打ち合わせを行った。第1回トレーニング及び隊員予定者の打ち合わせは7月に黒伏山南壁合宿で行うこととなった。

平成7年度 指導員研修会報告 ㊥

指導員会　三富一弥

「無線について」

最近はアマ無線が多く山岳の分野でも普及してます。大体がリスクの大きい山行をやるような人は、万が一の時のために無線機を持って行きます。最近アマ無線の使い方が乱用で、山岳では非常に入りが悪いという指摘があります。それはモラルの問題で、岳人は昔の軍隊のようにガンガンやるそうです、これは当然戒めなければなりません。それ以前に無線についての決まり事項を理解していない。無線機をどういう内容で使用するのかとい法的な問題を理解できない人が多い。

緊急時の非常通信がありますが、その非常通信を出し過ぎるという批判があります。非常通信というのは電波法の52条によって強制力のもと使用する通信であって、それによって強制的にその周波数を使用できる代わりに、非常通信発信の場合電波管理局に届け出ることになっています。それで、この事故は本当に非常通信をしなければならない状況なのか考える必要があります。

非常通信以外に電波法施行規則37条人命救助に関する通信の条項があります。非常と言ったなら、岳人の間では非常非常非常と3回コールの、本当の非常通信しかないもんだというふうに思い込んでいる人が多いのです。37条の人命に関する通信という条項を最大限に利用して、これは強制力はもちろんありませんが、現在緊急事態が発生して非常通信として使っていますという事で、相手のモラルでどいてもらう。これは通信報告を

電波管理局に届ける必要がありません。そういった通信の使い方がありますので利用されるべきだと思います。安易に無線を使い過ぎますと、いろんな所で支障が出てきますので、指導員の方はその点留意して欲しいと思います。

「隊員の身分保障・救助隊保険」

自分達の捜索、他のパーティの捜索にかかわらず、遭難救助に出る時は、出動する人の最低限度事故に遭った時の身・分保障を、指揮を取る人は考えておかなければならない。都岳連は救助隊保険に加入してまして、これは救助隊出動で加入するという事を電話連絡するだけで、認められるように前もって保険会社と契約を交わしてます。事故の書類上の手続きは、出動するメンバー、氏名を電話連絡するだけで保険会社がしれくれる事になっています。

最近遭対協は一部救助隊に死亡時1億円出しています。やはり人の救助に駆けつけた人が事故に遭い、その家族の悲しい思いをする状況だけは避けなければなりませんので、保険の整備という事も合わせて組織遭対で保険の加入は必要と思います。

南極だより　7号

越冬隊員　片桐一夫

（1996・8・24　ドーム基地　FAX発）

新潟県山岳協会の皆様、極寒のドーム基地より残暑お見舞い申し上げます。

それとも、もう随分と過ごし易くなっていますでしょうか？

本日正午すぎ、掘削機がついに2000mを突破しました。

私にとっては、朝を迎えたドーム基地よりもどんなにか嬉しいことです。

2000m直前で、いくらかのトラブルが発生して足踏みをしましたが、なんとかクリヤー出来て大台を迎えたわけです。

2000mと言いますとその孔底の圧力は200kg／cmもあり、非常な圧力差のところをドリルが往復している訳で、更に、その地点と地上との温度差の苛酷な条件があってシステム全体が酷使されています。そのため気密室（ドリルコンピュータが入っている）に液封液が侵入しつつあり、緊張状態が続いています。目標の2500mまで残り500mですが、いままで以上に困難が待ち受けているように感じています。

さて、硬い話はこれくらいにして、ドーム基地では8月17日に、蜃気楼による太陽の顔を見ることが出来ました。雪原線に歪んだ太陽が見えました。

翌18日には本物の太陽が半分ほど見えて、19日にようやく全体像が見えました。この時、いわゆる〝転がる太陽〟を写真に納めるべく毎日努力した事は言うまでもありません。しかし、当初は、撮影開始するとじきにカメラのシャッターが凍結して動かなくなり、参りました。後半はカメラ全体にヒーターを巻き付けて凍結を防ぎ、何とか撮影出来たように思います。

我々37次ドーム越冬隊は極夜の期間、精神的に落ち込むこともなく生活してきたためか、または、私がかなり〝ボケ〟ているためか、〝日の出〟を見たときの感動はそれほど感じませんでした。太陽は、毎日少しずつ出ている時間が長くなり、高さも次第に高くなっています。昨日は、太陽による〝日陰〟を見てその新鮮さを改めて感じています。外気温は、あいかわらず、マイナス70℃前後をフラフラしていますが、マイナス80℃の壁は厚く、越えられるかどうか判りません。今日は、8月初めてのブリザードで、外はホワイトアウト状態です。このため、外気温も上昇してマイナス44・7℃。風速11・5m。（23時30分現在）

昨日までは毎日晴天で、オーロラも連日出ましたが、月が満月に向かっていてオーロラの光が負けてしまい、しばらくはワッチも駄目でしょう。

これからは、南極マリモや、太陽の不思議な現象などを撮影して楽しみたいと考えています。

（片桐さんのメッセージが科学博物館に展示されています）

科学博物館では夏休み中の企画展「南極雪氷ものがたり・南極岩石ものがたり」を開催していましたが、好評のため9月29日まで会期延長しました。科学博物館依頼による片桐さん送信のメッセージ（8月18日付）も展示されています。機会をみて企画展をご覧ください。

登山用品専門店
―― 信頼できるパートナー ――
大新スポーツ
新潟市東堀6 ☎(025)222-3736